

コミュニティ・ハブとしてのドッグパーク

——利用者対象の調査結果と対立と交渉の経過の分析——

麻布大学 大倉健宏

1 目的

本報告の目的は、飼い主とペットと飼い主ではない住民にとって、暮らしやすい地域のありかたを調査結果から明らかにすることである。また「ペットフレンドリーなコミュニティ」での揺らぎと争点を検討することで、事例を立体的に示したいと考える。言い換えれば、個人、家族、居住、ネットワーク、コミュニティを、ペットを中心に据えて、新たなコミュニティのイメージを描くことを目的とする。またドッグパークという場のコンテクストを検討することで、災害時などクリティカルな場面でのコミュニティ・ハブとしての可能性を示す。

2 調査方法

報告者は2013年から4回にわたり、アメリカ合衆国カリフォルニア州サンフランシスコ市・パークレイ市、およびニューヨーク州ブルックリン区にて質問紙による調査を実施した。この調査は同調査地にあるドッグパーク・ドッグラン利用者を対象とした調査である。有効回答は350票である。調査内容としては、属性・社会経済的条件・住居・居住・飼育・ペットを介した友人・飼育マナーなどについて、紙媒体調査票（2013年・14年調査）・タブレット調査票（2017年・18年調査）を用いて質問した。実施時期は8月末から9月にかけての週末午前中、天候・気温など同様の条件のもとで実施した。調査地の一つであるパークレイ市オーロンドッグパーク (Ohlone Dog Park) については、大型犬用サイトと小型犬用サイトの分離を含むリノベーション計画の立案から、利用者や利用者ではない周辺の住民をめぐる対立と紛争発生、公聴会を経た計画変更に至る行政文書やボランティア組織の記録が残されている。これらのドキュメントの分析と、同公園をめぐる周辺地域との対立経過について言及する。

3 結果

調査結果からは、飼育経験の短い飼い主が飼育に関する知識を、ペットを介した友人「ペット友人」から得て、世帯規模の小さい家族で暮らすという実態をみる事ができた。このような飼育実践において、ドッグパークを中心とした「ペットフレンドリーなコミュニティ」は、飼い主である住民を支え、ネットワークの中心として機能している。一方で空間は、多様な価値を持つ住民の利害が鋭く対立する場であることが明らかになった。

4 結論

「ペットフレンドリーなコミュニティ」が飼い犬を中心として、ペットと共生できるコミュニティのモデルを提案する意義は大きいと考える。そこでは下位文化による結合が、「相談」「親交」「実用的」のいずれにも収斂しえない、住民の「ペットフレンドリーなコミュニティにおけるシビリティ」が想定されるだろう。

参考文献

大倉健宏, 2016, 『ペットフレンドリーなコミュニティの条件——イヌとヒトの親密性・コミュニティ疫学試論』ハーベスト社。